

武田泰淳『司馬遷』の方法

道園 達也^{1,*}

The Method of Taijun Takeda's "Shiba Sen"

Tatsuya Michizono^{1,*}

Taijun Takeda modernizes *Shiki* in *Shiba Sen*. The term 'modern era' in *Shiba Sen* includes a dual-layered present: the present in *Shiki* and the wartime present of the Sino-Japanese War and World War II. Its historical perspective is based on Buddhist concepts of time. This is an allegory that interprets the wartime present and the realities of Japan by reflecting the structure of *Shiki*. The work is a form of bricolage.

キーワード：『史記』の現代化、歴史観、諷諭、ブリコラージュ

Keywords : Modernizing *Shiki*, Historical perspective, Allegory, Bricolage

1. 『史記』の現代化

武田泰淳『司馬遷』[1943]は『史記』を現代化する。

武田泰淳(1912-1976)は仏教学者の家に生まれた。伯父渡辺海旭、父大島泰信はいずれも仏教学者である。武田という姓は父の師僧である武田芳淳の姓を継いだものである。長じて竹内好や岡崎俊夫らとともに中国文学研究会を創設した。戦後文学者として多様な作品を発表した武田泰淳の知の基盤は仏教と中国文学であった。

『司馬遷』は戦時下の昭和18(1943)年4月、東洋思想叢書の一冊として日本評論社から刊行された。戦後は昭和23(1948)年11月、『史記の世界』と改題、改稿され菁柿堂から刊行された。以後、現時点で最新の令和4(2022)年9月刊行の中公文庫版『司馬遷』に至るまで、抄録を含めて出版されたもの20種以上に及ぶ。『司馬遷』は武田泰淳の代表作として定評がある。

『史記』は『国訳漢文大成史記一』[1922]所収の公田連太郎「史記解題」によれば次のような書物である。

史記は、上は黄帝より下は漢の武帝に至るまでの歴史である。凡そ二千五百余年の事蹟を包括し、本紀十二篇、表十篇、書八篇、世家三十篇、列伝七十篇、

凡て百三十篇より成る。本紀は帝王の事績を述べ、表は世系年歳を詳かにし、書は礼楽制度天文経済等の沿革を明かにし、世家は諸侯の興亡を敘し、列伝は著名なる個人の性行を記す。⁽¹⁾

『史記』の書法は紀伝体である。「紀伝体とは、本紀列伝表書志等の名目を立てて事蹟を敘述する書法にして、史記は実に嚆矢なり」という。⁽²⁾『史記』の成立年は『司馬遷』において参照されている山下虎次『史記編述年代考』[1938]によれば「始元三年」、紀元前84年である。⁽³⁾

武田泰淳は『司馬遷』の「自序」において次のように述べている。

私が「史記」について考え始めたのは、昭和十二年、出征してからである。はげしい戦地生活を送るうち、漢代歴史の世界が、現代のこのように感じられた。歴史のきびしさ、世界のきびしさ、つまり現実のきびしさを考える場合に、何かよりどころとなり得るものが、「史記」にはあると思われた。⁽⁴⁾

川西政明「武田泰淳年譜」[2005]⁽⁵⁾によれば、武田泰淳が召集令状を受け、入隊したのは昭和12(1937)年10月16日であった。同年7月7日の盧溝橋事件以降、日本が中国大陸の戦線を拡大していた時期である。

中国文学研究会は「中国文学の研究と日支両国文化の交驛を目的とする研究団体」であった。⁽⁶⁾ その一員として活動していた武田泰淳にとって、兵士として中国各地を転戦することは、どうしようもなく困難な状況を生きることであつたらう。竹内好が『司馬遷』について「私

¹ リベラルアーツ系
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Liberal Arts
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

* Corresponding author:
E-mail address: mitazono@kumamoto-nct.ac.jp (T. Michizono).

は無力だ」ということを、くり返し、くり返し、強調しているに過ぎない⁽⁷⁾というのは、その状況を踏まえたものであろうと思う。

武田泰淳が昭和14(1939)年10月1日の召集解除後、昭和16(1941)年12月8日の太平洋戦争開戦を経て『司馬遷』を出版するまで、どのように日々を送ったかについては「自序」に詳しい。

武田泰淳は「はげしい戦地生活を送るうち、漢代歴史の世界が、現代のこのように感じられた」という。『司馬遷』において「現代」は次のように用いられている。

①実に古い古い手紙(司馬遷「任安に報ずるの書」…引用者注)であるが、その手紙にもられた彼の気持は、実によく現代でも読んでわかるのである。⁽⁸⁾

②残されし物、永き年月を生きのびた物、古典「史記」を再び、現代に復活させる方が、これ以上、司馬遷伝をつづけるより、私には興味がある。⁽⁹⁾

③今、わたくしたち日本人は何故「史記」を読むのであろうか？(中略)二千年も以前の、漢人の書きしるしたものが、何故現代の日本人に話しかける力を持っているのであろうか？⁽¹⁰⁾

④史記的世界は要するに困った世界である。世界を司馬遷のように考えるのは、困ったことである。ことに世界の中心を信じられぬ点、現代日本人と全く対立する。⁽¹¹⁾

引用①と②は「第一篇司馬遷伝」中の用例である。「古い古い手紙」および「古典」が「現代」と対比されている。引用③と④は「第二篇「史記」の世界構想」中の用例である。前者は「序説」、後者は「結語」に含まれ、いずれも戦後の青柿堂版で削除された。そこでは「二千年も以前」と「現代」および「司馬遷」と「現代日本人」が対比されている。以上の用例は武田泰淳が『史記』について考え、書き、そして『司馬遷』出版に至る日中戦争と第二次世界大戦下の現在を指す「現代」である。

一方、次のような用例もある。

⑤彼(司馬遷…引用者注)が批判者として、乱世漢代を対象とするまでには、更に大きな激発が必要である。漢代世相、漢代世界、漢代人間を、「憤りを以て書」かせるために、天漢二年、天は彼に、李陵の禍を下したもうた。彼が真の意味で、現代史を書こうと、決意したのは、この事件によってであると、思う。⁽¹²⁾

⑥彼(孔子…引用者注)には、それが出来なかった。現代を乱世なりとし、世界を批判の対象とし、どこまでも否定的態度で終始したため、安んずべき家を喪ったのである。⁽¹³⁾

⑦いずれにせよ、孔子は、現代には絶望を感じた人である。⁽¹⁴⁾

司馬遷が「乱世漢代を対象と」して「現代史」を書くということ(引用⑤)、孔子が「現代を乱世なりとし」、「現代には絶望を感じた」ということ(引用⑥⑦)、これらの用例は戦時下の現在ではなく、『史記』を書く司馬遷および『史記』に書かれた孔子の現在を指す「現代」であろう。

武田泰淳は二つの現在を同じ「現代」という言葉で捉えている。すなわち『司馬遷』の「現代」は戦時下の現在と『史記』の現在という二重の現在を同時に把握する。そこで「乱世漢代を対象と」して書くのが「現代史」であるといい、「現代を乱世なり」というように「現代」とは乱世である。

武田泰淳が『司馬遷』の「自序」において述べていた「はげしい戦地生活を送るうち、漢代歴史の世界が、現代のこのように感じられた」というのは「現代」とは乱世であるという認識の端緒であったと言える。

そうして、武田泰淳は『司馬遷』において二重の現在を「現代」として同時に把握し、いずれも乱世と見なすことで『史記』を現代化したのである。

2. 歴史観

『史記』の現在と戦時下の現在を同時把握する歴史観は近代歴史学の一般的な時代区分に対して異例である。武田泰淳は『司馬遷』の「後記」において「司馬遷の史学」と「鈴木氏等がとりあげたランケの世界史学」⁽¹⁵⁾を対比している。「鈴木氏」は鈴木成高であり、相原信作との共訳書にランケ『世界史概説』[1941]がある。

ランケは「神の理念の立場から」みて「人類」の「発展の限りなき多様性」が、いかに「神秘かつ偉大に顕現してきた」⁽¹⁶⁾かという観点で、たとえば「世界発展の三つの異なった段階」として「(一)ローマ的段階—一世紀から四世紀まで。(二)ゲルマン民族の移動侵入および回教のローマ帝国征服の時代—四世紀から八世紀まで。(三)カロリング帝国およびドイツ帝国」⁽¹⁷⁾などと述べている。

また、鈴木成高は『歴史的国家と理念』[1941]においてランケ史学が「いわゆる世界史的立場」を標榜しつつも「ヨーロッパの立場を出でない」⁽¹⁸⁾と批判する。そして「今日においては、この空間的多元的なる世界が、時間的世界となったことによって、そこに、統一的なる「世界史的世界」が見られるのではないか」⁽¹⁹⁾といい、その成立過程は「(一)地中海的世界の段階(古代)—(二)ヨーロッパ的世界の段階(中世)—(三)ヨーロッパ世界

の膨脹の段階（近代）—（四）世界史的世界の段階（現代）となる」⁽²⁰⁾と述べている。

ランケのいう「発展」および鈴木成高のいう「世界史的世界」の成立の段階は近代歴史学の一般的な時代区分に対応している。特に「世界史的世界」の成立が古代—中世—近代—現代という時代区分に基づいて説明されていることと比較すれば、『司馬遷』の「現代」が『史記』の現在と戦時下の現在を同時に把握することは異例の歴史観と言ってよいであろう。そこには、たとえば古代と現代という時代区分はなく、ただ乱世としての「現代」があるだけなのである。

この歴史観は仏教の時間認識に基づくであろう。武田泰淳の「滅亡について」[1948]に次のような表現がある。

南方伝来の仏典である「本生経」には、仏が出現するための三つの予告が記されている。その第一の予告は滅亡である。（中略）ここでも滅亡は、常識を越えた時間と空間にわたって、予告されている。「十万年経つと」「須弥山も共に」「大梵天に至るまで」と、紅衣を著けた、異様な天人は叫ぶのである。⁽²¹⁾

仏教には「十万年」を視野に収める遼遠な時間認識がある。それに比べて短いものの近代歴史学の時代区分が数百年単位であるのに対して「二千年も以前」の『史記』の現在と日中戦争から第二次世界大戦に至る戦時下の現在を同時把握するのは「常識を越えた時間」の認識があると言えよう。武田泰淳は仏教の時間認識を基盤として、二重の現在を「現代」として同時把握したのである。

3. 諷諭(Allegory)

武田泰淳は「歴史のきびしさ、世界のきびしさ、つまり現実のきびしさを考える場合に、何かよりどころとなり得るものが、「史記」にはあると思われた」という。ここにある「現実のきびしさ」と「何かよりどころとなり得るもの」は『司馬遷』における二重の現在に対応する。

現実のきびしさ—戦時下の現在

何かよりどころとなり得るもの—『史記』の現在
佐藤信夫によれば、二つの系列が平行することによって成立するレトリックを諷諭という。

ある実態がそれ自体で構造化されているならば、諷諭はその構造をそれに平行する別の構造に反映させてみる、《たとえばなし》だということになる。しかし、ある実態が既成の構造をあらわしていないばあいには、反映はむしろ逆になるのであって、私たちは《たとえばなし》の構造化を、構造不明の実態の

ほうへ反映させて、はじめてその実態を把握するのであった。そのとき、諷諭は混沌の現実を解読する認識行為にほかならない。⁽²²⁾

武田泰淳のいう「現実のきびしさ」は「既成の構造をあらわしていないばあい」に該当しよう。そうでなければ、それについて考えるとき「何かよりどころとなり得るもの」など不要だからである。したがって「現実のきびしさ」とは「構造不明の実態」である。そこで諷諭は『史記』の構造を反映させることで「現実のきびしさ」を「解読する認識行為」であった。

武田泰淳は『司馬遷』において「人間」をきわめることが「世界の歴史を書き、歴史全体を考え」⁽²³⁾ることであるといい、『史記』の構造を明らかにする。

「史記」の問題にしているのは、史記的世界全体の持続である。個別的な非持続は、むしろ全体的持続を支えていると言ってよい。史記的世界は、あくまで空間的に構成された歴史世界であるから、その持続も空間的でなければならぬ。⁽²⁴⁾

「史記的世界」では、あらゆる国家、あらゆる人間が持続しない。そのような「個別的な非持続」に支えられているのが「史記的世界全体の持続」である。それを「空間的に構成された歴史世界」と呼ぶのは一つの国家、一人の人間の興亡を時間の流れに沿って見るのではなく、国家と国家、国家と人間、人間と人間の間を空間の中に並立し、あるいは乱立するもののように見ようとするからである。その空間の中で「個別的な非持続」が繰り返されるとしても、空間そのものは持続する。

こうして「個別的な非持続」に支えられた「史記的世界全体の持続」が『史記』の構造として析出され、それによって「現実のきびしさ」が解読される。それが乱世の構造であった。

さて、引用③と④が戦後の菁柿堂版で削除されたのは『武田泰淳全集第十一巻』[1971]所収の古林尚「解題」によれば「作者の意嚮によるものではなく、当時の特殊な出版事情から、泰淳の口を借りれば「善意の編集者の善意の判断で独自に」行なわれた」⁽²⁵⁾という。「当時の特殊な出版事情」がGHQによる検閲制度を指しているとするれば、それは引用③を含む「序説」の前半、引用④を含む「結語」が戦時下日本を礼讃する表現と見なされ、出版禁止を命じられることがないようにするための措置であったと考えられよう。当時の詳しい対応状況は分からないものの如上の判断が、どこかで働いたのではないか。

しかし、中野重治がいうように「結語」などは、日本世界中心説の正面からの否定、日本永続説の正面からの

否定なので（中略）これがそのまま昭和十八年に出たことは驚きだといってよかった⁽²⁶⁾のである。たとえば「結語」における「我々の場合は日本および日本の中心を信ずることのみが、歴史に参加することになる」⁽²⁷⁾などの表現は日本を礼讃し尽忠報国する言葉のように見える。しかし「日本および日本の中心を信ずる」などと繰り返せば繰り返すほど歴史参加の決意表明とともに日本も一つの国家として「個別的な非持続」を避けられないことを強調することになる。諷諭によって解説されるのは日本の現実でもあった。

4. ブリコラージュ

たとえば、和辻哲郎は『風土』[1935]において「人間存在の有限的・無限的な二重性格」として「個人の立場から見て「死への存在」であることは、社会の立場からは「生への存在」である」⁽²⁸⁾という。前者は「個別的な非持続」に、後者は「史記的世界全体の持続」に対応する。岩上順一は『歴史文学論』[1942]において「過去と現代とを結合すること」について次のように述べている。

歴史の真生命を、現代のもっとも深い歴史認識にしたがって把握し、歴史の全的な支配法則を形象化すること。そのためには、系譜や年代記による概括とは全く異った概括方法が必要であること。⁽²⁹⁾

その観点からすれば『史記』の構造は「歴史の全的な支配法則」を示し、二重の現在を同時把握するのは「系譜や年代記による概括」とは異なる方法であると言えよう。

そのほかにも『司馬遷』が「鴻門の会」を「宇宙的な会合」といい、項羽と高祖をはじめとする参会者を「天体」⁽³⁰⁾に喩えるのは、ランケが『世界史概説』で18世紀半ばのロシアを含む西欧列強を「不断に相携え相並運動する同数の天体に比較」⁽³¹⁾するのと同様の観点がある。

また、ポーの『ユレイカ』[1935]を引用し「宇宙の聚合と消滅」が「永遠に、永遠に、永遠に繰り返されるであろう」ことの「希望」⁽³²⁾を語るのは、三木清が『歴史哲学』[1932]において時間の観念の一つとして概説する「古代的な回帰的時間」に通じるであろう。それは「諸国家の全発展は、興起、成熟及び死滅という段階を通じて運動し、かくて次に再び繰り返して最初からこの過程を始めるという思想」⁽³³⁾なのである。

このように雑駁な整理であっても、1930～40年代の哲学、歴史文学論、歴史学、歴史哲学と『司馬遷』の間に類似し、共通する言説を見出すことができる。それらを見れば、武田泰淳の仕事はブリコラージュ、すなわち「あ

りあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作る」⁽³⁴⁾のような知の営みだったのではないかと思う。『司馬遷』は仏教の時間認識に基づく歴史観によって二重の現在を同時把握して『史記』を現代化し、その構造を析出した。それは「現実のきびしさ」と日本の現実を解説する諷諭であった。武田泰淳はブリコラージュによって『史記』とともに「現代」について考えることをやめなかった。

(令和6年10月4日受付)

(令和6年10月28日受理)

参考文献

- (1) 公田連太郎：「史記解題」, 「国訳漢文大成史記一」, pp.20-21, 国民文庫刊行会(1922)
- (2) (1)に同じ, pp.25
- (3) 山下虎次：「史記編述年代考」, p.181, 六盟館(1938)
- (4) 武田泰淳：「司馬遷」, p.2, 日本評論社(1943)
- (5) 川西政明：「武田泰淳年譜」, 「武田泰淳伝」, pp.490-514, 講談社(2005)
- (6) 無署名：「中国文学研究会に就て」, 中国文学月報, No.1, p.12(1935)
- (7) 竹内好：「解説」, 「司馬遷」, p.197, 創元文庫(1952)
- (8) (4)に同じ, p.5
- (9) (4)に同じ, p.41
- (10) (4)に同じ, p.43
- (11) (4)に同じ, p.219
- (12) (4)に同じ, p.40
- (13) (4)に同じ, pp.107-108
- (14) (4)に同じ, p.112
- (15) (4)に同じ, p.225
- (16) ランケ, 鈴木成高・相原信作訳：「世界史概説—近世史の諸時代—」, p.40, 岩波文庫(1941/1961 改版/2012 第53刷)
- (17) (16)に同じ, pp.117-118
- (18) 鈴木成高：「歴史的國家と理念」, p.5, 弘文堂書店(1941/1942 再版)
- (19) (18)に同じ, p.217
- (20) (18)に同じ, p.219
- (21) 武田泰淳：「滅亡について」, 花, No.8, p.15 (1948)
- (22) 佐藤信夫：「レトリック認識」, p.214, 講談社学術文庫(1992)
- (23) (4)に同じ, p.47
- (24) (4)に同じ, p.134
- (25) 古林尚：「解題」, 「武田泰淳全集第十一巻」, p.389, 筑摩書房(1971)
- (26) なかのしげはる(中野重治)：「司馬遷」と「吉野秀雄歌集」, 声, No.3, p.130(1959)
- (27) (4)に同じ, p.219
- (28) 和辻哲郎：「風土」, p.16, 岩波書店(1935)
- (29) 岩上順一：「歴史文学論」, p.197, 中央公論社(1942)
- (30) (4)に同じ, p.78
- (31) (16)に同じ, p.257
- (32) (4)に同じ, p.105
- (33) 三木清：「歴史哲学」, pp.165-166, 岩波書店(1932)
- (34) クロード・レヴィ=ストロース, 大橋保夫訳：「野生の思考」, p.22, みすず書房(1976)

※本文はすべて日本の新字新仮名に直して引用した。